

## 原 著

順天堂大学医療看護学部 医療看護研究19  
P.33-41(2017)

## 欧米の少女誘拐・長期監禁事件サバイバーのレジリエンス ～ナラティブ分析を中心に～

### Resilience of Girls Who Survived Kidnapping, Long-term Captivity, and Sexual Abuse in America and Europe :

#### A Qualitative Descriptive Study of the Narratives of Three Sex Crime Survivors

宮 津 多美子<sup>1)</sup>  
MIYATSU Tamiko

小谷野 康 子<sup>1)</sup>  
KOYANO Yasuko

石 橋 和 代<sup>2)</sup>  
ISHIBASHI Kazuyo

#### 要 旨

未成年、とくに幼い子どもを犠牲者とする性暴力は卑劣な犯罪である。性犯罪サバイバーの多くがプライバシー保護のために沈黙を選ぶ中、欧米では少女時代に誘拐され、長期（6か月以上）にわたり監禁された事件のサバイバー女性3名が、21世紀に入って相次いで実名ナラティブを出版した。アメリカのエリザベス・スマート、ジェイシー・リー・デュガード、オーストリアのナターシャ・カンブッシュである。これらのナラティブには、肉体的・精神的・性的暴力の被害で受けた心的外傷およびその回復過程が描写されている。本論は、逆境に対応し、困難や変化に適応する力である「レジリエンス」に注目して、これらの自筆ナラティブの質的叙事的分析を行い、ナラティブに描かれたトラウマとレジリエンスを精査した。その結果、レジリエンス獲得の要因として、「疑似家族」関係における主体的反抗、実の家族との絆、執筆による過去の再定義が抽出された。サバイバーの語りを支援することは加害者を断罪し、防犯への世論喚起を促すことにつながる。我々はサバイバーの語りを受容・包摂し、サバイバーの人権・尊厳を守るとともに、サバイバー救済のための体系的ナラティブ治療の確立を進める必要がある。

キーワード：性暴力、サバイバー、心的外傷、レジリエンス、ナラティブ・セラピー

Key words : sexual violence, survivors, trauma, resilience, narrative therapy

#### I. 序論

未成年に対する性暴力ほど卑劣かつ反社会的な犯罪はない。性暴力被害研究の第一人者、デイヴィッド・フィンケルホー (David Finkelhor) 博士によると、アメリカでは18歳未満の少女の5人に1人、少年の20人に1人が性犯罪被害に遭っているという<sup>1) 2)</sup>。日本でも、近年、子どもを対象とする暴力的性犯罪のうち、

わいせつ目的の略取・誘拐および強姦は増加傾向にある<sup>3) 4)</sup>。

性犯罪は、生涯にわたって人間の尊厳に甚大な影響を及ぼし、「魂の殺人」とも呼ばれる。特に、子どもへの影響は深刻だ。長期間の性暴力が子どもに与える症状として、低い自己尊厳、自己卑下、異常な、もしくは偏った性への態度、内向的、大人への不信感、自殺願望等が挙げられる<sup>1)</sup>。子どもの心的外傷は解放後も続く。1983年、精神科医ローランド・サミット (Roland Summit) は、性虐待を受けた子どもたちは、解放後に大人からの不信や叱責、拒絶を経験すること

1) 順天堂大学医療看護学部  
Faculty of Health Care and Nursing, Juntendo University

2) 青山学院大学  
Aoyama Gakuin University  
(Oct. 28, 2016 原稿受付) (Jan. 25, 2017 原稿受領)

で、二次的トラウマ、「(性的虐待) 順応性症候群」(Child Sexual Abuse Accommodation) を発症することを指摘している<sup>5)</sup>。

概して、性犯罪の告発は、被害者に精神的苦痛を与えることから、犯罪そのものが闇に葬り去られることも珍しくない。日本での申告率もわずか1割程度と推定される<sup>4) 6)</sup>。起訴に被害者の告発・告訴・請求を必要とする「親告罪」であることが、性暴力被害者の多くに泣き寝入りを選択させる原因となっている。アメリカ人作家で活動家のサンドラ・バトラー (Sandra Butler) は、性暴力は「加害者が強いる沈黙」「被害者が守る沈黙」「社会が培養する沈黙」の3つの沈黙の共謀により隠蔽されると指摘する<sup>7)</sup>。性犯罪を裁くには、「語ることを諦めた」<sup>5)</sup>、もしくは「沈黙を強いられた」<sup>7)</sup> 被害者自身が、まず被害を開示する必要がある。「サバイバー」(生存する犯罪被害者を肯定的にとらえる呼称) の訴えこそ加害者に制裁を課し、性犯罪防止の世論を喚起することになるからである。

これまで性犯罪サバイバーの証言は、ジャーナリストら第三者によって伝えられる断片的な証言がほとんどであったが、今世紀に入って欧米では実名による性犯罪被害の手記の出版が相次いでいる。日本ではプライバシー保護への懸念から、この種のナラティブ出版はほとんどない。本論では、「ナラティブ」を、本人の視点(一人称)から綴られた「物語・体験談」と定義し、出版された性犯罪被害の記録を扱う。ナラティブを書いた女性3人はいずれも思春期に誘拐され、長期監禁生活を経験した性犯罪サバイバーである。2002年に14歳で誘拐され、約9か月後、救出されたアメリカ人のエリザベス・スマート (Elizabeth Smart)、1998年に10歳で誘拐され、約8年間、監禁されたオーストリア人のナターシャ・カンブッシュ (Natascha Kampusch)、そして、1991年に11歳で誘拐され、18年の監禁生活で娘2人を出産させられたアメリカ人のジェイシー・デュガード (Jaycee Dugard) である。スマートは長期化した誘拐事件の裁判終結の2年後に、カンブッシュは救出4年後に、デュガードは救出2年後に自筆のナラティブを発表し、監禁生活での体験談を詳述している。

これまで児童・少女を対象とした性犯罪の加害者に関してはさまざまな精神医学的研究がなされ、その多くに精神疾患があることが指摘されている。加害者に最も顕著な症状である小児性愛、「ペドフィリア」(pedophilia) は、「思春期前の子ども(特に13歳未満)

に対する強度な性的妄想、性的な行為にかかわる振る舞いが、少なくとも6か月以上にわたって持続する」(米国心理学会) 精神疾患である。今回、取り上げる事例は3件とも、犯人は小児性愛者/ペドファイル (pedophile)、パラノイア (paranoia)、パーソナリティ障害 (personality disorder)、躁うつ病、ADD (注意欠陥多動性障害) 等の精神疾患が疑われている。

一方、性犯罪サバイバーについても、事件後の心的外傷(トラウマ)が認められている。このうち、カンブッシュ事件で注目されたのがストックホルム症候群 (Stockholm Syndrome) だ。ストックホルム症候群とは、1973年、銀行強盗事件の人質となった女性が犯人に協力しようとしたことから提示された概念で、被害者が犯人に対して抱く共感・同情を指す<sup>8)</sup>。カンブッシュは、解放後、「自殺した犯人は全くの悪人ではなかった」と警察に証言し、世間を驚かせた。

監禁中の精神状態、犯罪者への心理的变化、救出前後の希望や絶望について詳細に描写しているこれらのナラティブは、思春期の少女の長期的性犯罪被害の実相を検証するテキストとして有効である。本論は、長期間(6か月以上)、監禁された性犯罪サバイバーによるこれらのナラティブの質的叙事的分析により、執筆行為におけるレジリエンス獲得過程を明らかにする。近年、心理学、精神医学の分野で注目されている「レジリエンス」(resilience) は、「精神的回復力」「抵抗力」「復元力」等とも訳され、「ストレスに対抗して回復する能力」もしくは「侵襲を被る状態に置かれた局面で、これを乗り越え、新たな主体性を生み出す能動的な過程」を意味する語として使われる<sup>9)</sup>。また、精神科治療法としてのナラティブ療法 (narrative therapy) は、欧米で1990年代に提唱され、過去の負の経験を語り直す (storytelling/narrating) ことで意味付けし、未来の生へとつなぐカウンセリング手法として受容されている<sup>10) -13)</sup>。サバイバーが体験を語る・書くことによって、「これから生きる人生の文脈の中に、トラウマを位置づける(意味づける)役割」<sup>14)</sup>をもつという点で、この治療法は過去を現在、そして未来とつなぐプロセスといえる。

ナラティブの著者であるスマート、カンブッシュ、デュガードも性犯罪サバイバーとして、ナラティブを執筆する意義・意味について認めている。本論では、特に、実名でナラティブを書くことが、3人のレジリエンスにどのような影響を与えたのかに注目してナラティブを分析し、長期間、監禁された性犯罪サバイバ

ーが語ったトラウマからの回復とレジリエンス獲得の過程を明らかにし、犯罪サバイバー理解および治療支援の一助とする。

## II. 3人のサバイバーが綴ったトラウマ

### 1. エリザベス・スマート事件

スマートは3人のうち、最も短い拘束期間（9か月）の後に救出されたサバイバーである。すでに両親（*Bringing Elizabeth Home*, 2003）、叔父（*In Plain Sight*, 2005）が事件に関する本を出版していたにもかかわらず、スマート自らがナラティブを執筆したのは、犯人であるミッチェルを裁判で有罪にするためであった。スマートは、2011年、事件後の裁判で狂気を装い、責任能力を否定しようとしていたミッチェルについて反証し、長期化していた裁判を終結させた。これをきっかけに、スマートはサバイバーとしての「沈黙」を破る。同年、児童に対するネット犯罪の調査を支援するエリザベス・スマート基金（Elizabeth Smart Foundation）を設立し、2年後、自筆ナラティブを出版した。救出後、11年を経て彼女が自らペンを執り、出版した*My Story*（2013）から、彼女が経験したトラウマについて見ていきたい。

他の2つの事件との相違点は、スマートおよび誘拐犯ブライアン・ミッチェルがともに敬虔なモルモン教（Church of Jesus Christ Latter Days Saint、末日聖徒キリスト教会）の信徒であるということである<sup>15)</sup>。誘拐犯のモルモン教徒ミッチェルは自らを神から選ばれたインマヌエル（救世主）であると信じる狂信者であった。一夫多妻制を特徴とするモルモン原理主義者はアメリカ社会で長く迫害されてきた。独自の終末論を唱えるミッチェルは、神が自分に7人の若い妻を娶るように命じたと言った。16歳の時、8歳の少女を誘拐した罪での逮捕歴を持ち、スマートの誘拐後も彼女の従姉妹オリビアの誘拐も企てるが、失敗に終わっている。検察側の精神鑑定では、彼はベドフィリア、（反社会的、自己愛性）パーソナリティ障害と診断されている<sup>16)</sup>。

自己執筆のナラティブによると、ミッチェルは9か月間、エリザベスの心身を支配した。レイプ、捕縛、飢餓によって彼女を無気力状態へと追い込んだ。放浪しながらキャンプで暮らす彼らの生活は常に困窮していた。彼女の命は、ミッチェルが物乞い、万引きで得た食料でつながれていた。サンディエゴでは、ミッチェルが妻ワンダと口論した後、テントを去ったた

め、彼が帰るまでの7日間、食料・飲料水なしで過ごし、死と直面している。「私は骨のように渴いていた。……脱水症で死ぬ可能性があった」と彼女は回想している<sup>15)</sup>。脅迫、人格攻撃によって彼女を精神的に迫害するだけでなく、ミッチェルはモルモン教徒にとって禁忌である飲酒を彼女に強要した。特に飲酒は敬虔なモルモン教徒である彼女をひどく苦悩させた。家族に危害を加えるという脅迫は、彼女に逃亡を諦めさせた。家族を守るために彼女は監禁生活に耐えようと決意したという。

### 2. ナターシャ・カンブッシュ事件

「女優を夢見ていた」10歳の少女の幸せな日常生活が奪われたのは、1988年のある日の登校途中だった<sup>17)</sup>。その日から始まった監禁生活は、その後8年半も続くことになる。救出後、カンブッシュ自身が綴った手記*3,096 Days (3,096 Tage)*, 2010, Germany)から、彼女が経験したトラウマについて分析する。

スマート、デュガードの誘拐犯がともに夫婦で犯行に及んだのに対し、カンブッシュの誘拐犯ウルフガング・プリクロプリル（Wolfgang Priklopril）は単独犯で、その意図も他の犯人とは異なっている。プリクロプリルは、幼い少女を自分の思い通りに育て、やがて自分の妻にしようという野望を抱く夢想家であった。この所業は、いわゆる「ピグマリオン効果」（Pygmalion Effect）を思い起こさせる。「ピグマリオン効果」（Pygmalion effect）は、1964年にアメリカの教育心理学者ロバート・ローゼンタール（Robert Rosenthal）が唱えた教育心理学の概念で、学習者は教育者が期待した通りの教育成果を上げるという理論で「自己達成の予言」（a self-fulfilling prophecy）とも呼ばれている<sup>18)</sup>。この事件においても、犯人のプリクロプリルは少女を「教育」し、期待通りの女性に成長させようとした。ナラティブでは、彼女は性的関係についてはほとんど語っていないが、30代半ばのプリクロプリルは初潮を機にカンブッシュに性的関係を求めてきたという<sup>19)</sup>。

プリクロプリルは完全な徹底的さをもって彼女の心身を支配しようとした。カンブッシュは、冷静な観察眼でその詳細を分析している。彼女の眼には、彼はパラノイアであり、拒食症のように小食で、マザコンで、病的な潔癖症であり、女性恐怖症であり、ひどい精神疾患を患っているように見えた<sup>20)</sup>。彼は地下室に備え付けたカメラで常時、少女を監視し、気に入らないこ

とがあるとマイクで少女を脅迫した。常に見られているという恐怖は彼女を苦しめた。罵詈雑言、暴力、飢え、レイプはカンブッシュの自己尊厳を奪った。

彼女は虐待により飢え死にしかけた経験を綴っている。「私はあまりの空腹さのために魚一切れのために殺人さえ犯すことができただろう」と彼女はその苦しみを表現している<sup>21)</sup>。さらに犯人の暴力は彼女の抵抗する気力を奪った。日記には「2005年8月23日：顔に少なくとも60発。頭部への10～15回の殴打で吐き気、頭に4回平手打ち、右耳と顎を力いっぱい殴られた。耳が黒ずんだ」とある<sup>22)</sup>。地下室から出された後、逃亡を防ぐため、裸で過ごすことを強要された。日常的な虐待は彼女の心と身体を拘束し、逃亡する意欲さえ奪ったとカンブッシュは綴っている。

この事例において特筆すべき点は、後に彼女がストックホルム症候群と揶揄されたように、サバイバーの犯人への感情が相反的であったことである。幼い少女は成長するにつれて、厳しい躰、精神的束縛によって自分を追いつめた犯人を憎む一方、犯人のトラウマや孤独にも触れて彼に同情するようになる。逃亡直前、自分と理想の家庭を築く夢を語るプリクロプリルを「疑似家族」として哀れんでいる<sup>23)</sup>。この相反する心情はカンブッシュの誘拐時の年齢に関係があると考えられる。3人のうちで最も幼かったカンブッシュにとって犯人は親代わりだった。プリクロプリルは搾取・虐待したが、同時に少女を養育した。食べ物を与え、衣服を与え、戸惑いながら生理用品を買い、本を与えて読み書きを教えたと彼女は綴る。犯人に「抱きしめてほしい」と頼む場面がその関係を象徴している。10歳の少女にとって誰にも触れない何カ月もの時間はあまりにも長かった。「人肌の慰め、人間の温かさの感覚を必要とした」カンブッシュは、この時、自ら誘拐犯にそれを求めたという<sup>24)</sup>。彼女の心身の成長を助けたプリクロプリルは、単に憎むべき凶悪犯ではなかった。

それでも、犯罪によって結ばれた偽の絆は真実のものとはなりえなかった。18歳のカンブッシュが逃亡を果たしたとき、プリクロプリルは絶望して死を選び、カンブッシュはトラウマと決別するため全3,096日を語り始めた。

### 3. ジェイシー・デュガード事件

アメリカ人の少女ジェイシー・リー・デュガードは11歳の時に、フィリップ・ガリドーとその妻によって

誘拐され、ガリドーの自宅で監禁された。その監禁は実に18年にも及ぶ。この間、デュガードがどのような逆境におかれていたのかを、彼女が著したナラティブ *A Stolen Life: A Memoir* (2011) を通して明らかにする。

主犯のガリドーは、性的倒錯者及び麻薬常用者であった<sup>25)</sup>。18歳で麻薬所持の罪で逮捕歴があり、21歳で14歳の少女をレイプした罪に問われている。翌年、結婚するも、3年目で彼が2度目のレイプ事件を起こして離婚した。この事件によってガリドーは50年の禁固刑に処せられたが、わずか11年で釈放された。その4年後の1991年、ガリドーは2人目の妻ナンシーとともに、この少女誘拐監禁事件を起こす。ナラティブによると、夫婦は11歳のデュガードを車に連れ込み、自宅の裏庭に18年間に渡って監禁し、性的虐待を繰り返した。少女は14歳と17歳のときに妊娠し、2人の娘の母親となった。この間、度々、保護観察官がガリドーの家を訪れたが、彼女が29歳になるまで発見されるには至らなかったという。

女性に対する異常な支配欲と倒錯した性癖をもつこの犯人は、身体的暴力と精神的暴力によりデュガードを支配した。誘拐直後、裏庭にある部屋に彼女に手錠をかけて監禁し、身体的自由を奪った。食事の時だけは手錠を外されたが、彼女にとっては時間も日付もわからないまま時が過ぎた。バケツに用を足すことを強いられ、レイプという言葉も知らない年齢でレイプされた。次第に手錠を外される時間が増えるようになったものの、性的虐待は続いた。

身体的に支配する一方、ガリドーは、食事もトイレの世話も自分に頼らざるを得ない環境を作ることによって、デュガードを自分に依存させ、精神的にも支配した。インターネットの使用を許可しながらも「インターネットでお前が何をやっているかは逐一調べられる」と脅して、ネットを通しての連絡を思いとどませる一方で、外の世界に対する恐怖心も植え付け、自分の家の裏庭だけが安全だと思こませた<sup>26)</sup>。監禁中、デュガードは「アリッサ」という名前で呼ばれていた。さらに2人目の娘の出産後は、娘たちを妹と見なすように強いられ、ナンシーの娘として生活させられた。18年間、デュガードは名前も思考も母性も奪われた。

### Ⅲ. レジリエンスの源泉

#### ～主体的反抗、家族との絆、書く行為～

これらの事件の犯人が誘拐・監禁した少女（女性）

に対して用いたのは3種類の暴力だ。性暴力（性的搾取）、身体的暴力（拘束、殴打、飲食の禁止、閉所への監禁）、そして精神的暴力（家族や自身に対する脅迫、人格攻撃）である。これらの暴力によって犯人は少女の心身を支配した。

3種類の暴力のうち、少女の尊厳に最も深刻な影響を与えたのはおそらく性的暴力であろう。アメリカの歴史家アンジェラ・デイビス（Angela Davis）によると、レイプは支配・抑圧の武器であり、女性の身体および精神の両方にダメージを与え、女性に抵抗する意思を失わせる、最も屈辱的な暴力だという<sup>27)</sup>。性的暴力は特にその意味も分からない10代の前半の無垢な少女にとって耐えがたい苦痛となる。3人のナラティブからも、習慣的な性暴力への恐怖が少女らの精神を麻痺させたことが窺われる。

さらに追い打ちをかけたのが身体的暴力であった。死に直面するほどの飢えや乾き、そして、度を越した殴打は、少女の思考を奪った。衣食住のすべてを握る犯人への服従は、少女の生存の可能性を左右した。少女は生き延びるために現実を受け入れ、監禁生活に適応しようとした。

さらに、繰り返される精神的暴力は、少女に抵抗する気力を喪失させた。中傷や暴言、脅迫は、少女に「疑似家族」への消極的適応を強いた。犯人は家族への危害をちらつかせることで、逃亡する意思を奪った。家族との絆が強ければ強いほど、少女は逃げられなくなった。さらに、度重なる激しい人格攻撃により、少女は自立心・自尊心を完全に失っていく。繰り返される「お前はつまらない人間だ」「お前は誰にも愛されていない」という言葉はやがて内在化され、少女はこれを「真実」として受け入れるようになる。これらの手段による社会的弱者の心身支配は、19世紀のアメリカ奴隷制だけでなく、現代においても親子間の虐待、カルトでの集団生活、人身売買組織などにも共通して見られる精神的支配構造である。

これらの暴力・支配に対して、さまざまな方法で少女たちはレジリエンスを見出す。主体的な反抗、家族との絆、そして書く行為である。

まず、監禁中、3人は「疑似家族関係」を演じる一方で、小さな「反抗」を通して、主体性を持ち続けようとした。スマートは新しい別人格を作ることで自我を保とうとした。ミッチェルから新たな名前シャル・ヤシュブ（Shearjashub）を与えられた際に、彼女はミドルネームを自分でつける許可を取りつけ、自らを

「エスター」と呼ぶように求めた。この行為を彼女は「小さな勝利」と呼び、生きる糧とした。スタンガンで脅されることもあったデュガードは、「彼に同意する方が簡単だ」と述べ、抵抗を諦めた<sup>28)</sup>。母性を否定されても彼女はナンシーを母親とした疑似家族関係に「懸命にすがりつこうとし」た<sup>29)</sup>。しかし同時に、彼女がガリドーに反抗していた点は注目に値する。「(わざと)口紅をつけ忘れ」たり、「彼がテレビに夢中になっているときは寝たふり」をするといった小さな抵抗で自我を保ちながら、「疑似家族」を演じ続けた<sup>30)</sup>。カンブッシュは自分の心身（inner self, outer self）を切り離し、無感情に自分を客観的に眺めようとした。正気を保つための子どもゆえの自己の防衛本能である。さらに12歳のとき、体力的に抵抗することができる18歳になったら必ず逃亡すると、将来の自分に誓いを立て、彼女はこれを実現した。誘拐犯がどれほど懸命に叩き潰そうとしてもできなかったカンブッシュ生来のレジリエンスが最終的に彼女を自由へと導いた。3人は、監禁中、強制された人間関係の中で加害者の要求を受け入れ、監禁生活に適応しながらも、ささやかな反抗によって自我を保ち続けた。

さらに、家族との絆は少女に希望を与えた。無力な少女にとって、安定した人間関係を築くことは自らの身の安全を確保することだった。3人の少女は自分の中に別人格を設定することで、暴力や性的搾取に耐えた。本来の自分（家族）と監禁中の自分（家族）を区別し、これは真の「自分」ではないと考えることで現実逃避して精神の安定を保ち、犯人に対する小さな抵抗の中に生きる意義を見出した。スマートがミッチェルの説く宗教に黙って従い、教義に背く飲酒に応じたのも、神の存在と家族の絆を信じていたからであった。「私が捕えられていた最も暗黒の日々、私が愛する誰か、私を愛する誰か、善良な人物である誰かが私のそばに立っているという思いが私を支えた。神はまだ私を愛していると思い出すことで私は耐えられた」と彼女は書いている<sup>31)</sup>。「穢された自分」を家族は再び受け入れてくれるだろうかと悩みながらも、彼女は「ゆで卵」のように自己を閉ざし、信仰と家族を支えに9か月間の監禁生活を耐え抜いた<sup>32)</sup>。カンブッシュは監禁中の自らの変化－退行、反抗、うつ、諦め、自殺願望－について語りながらも、一方で、母親への慕情、自己信頼、別人格の創造を糧に監禁生活に耐え抜こうとした。デュガードが心の支えにしたのも家族の絆だった。母が死

んでいないだろうか」と不安になった時も、「そんなことはないと言いつけさせ、そんなふうには怯えないように自分を仕向けなければならなかった」と振り返っている<sup>33)</sup>。18年間の監禁生活を生き抜いたデュガードのレジリエンスの源も母親であったことは間違いないが、デュガードの場合は、自身の出産によって、ともに監禁される娘への母性が芽生えたことも大きい。娘を見ながら母親を思い出して悲しくなることがあったが、そんな時彼女は「ネガティブな感情をポジティブな感情に変えなければならない<sup>34)</sup>」と自分に言い聞かせている。受動的・能動的母性が彼女を奮い立たせたことがわかる。

最後に、「書く」行為は、監禁中も解放後も少女のレジリエンスの源泉となった。事件後、生き延びた少女は過去と決別し、自身を取り戻すためにペンを執る。特に、「書くことが好き」だったデュガードにとって、綴る行為は、大きなレジリエンスの源となった<sup>35)</sup>。13歳の頃は飼っていたネコについて日誌をつけて気晴らしをしたし、19歳の時に始めた日記は少なくとも9年間続けたという。日記を始めたのは「すべての気持ちや感情のはけ口が必要だった」からと語るが、ナラティブでは、実際に、ある時は筆記によって混乱している感情を整理し、ある時は将来の夢を語り、またある時はガリドーへの怒りをぶちまけている<sup>36)</sup>。デュガードにとって、日記は、感情表現やストレス解消の手段となり、未来への希望をつなぐ生命線となった。

書く行為は解放後、再び彼女らの主体性を取り戻す手段となる。ナラティブを書くという行為によって、3人は過去を解釈し、(再)定義し、自らのレジリエンスを(再)獲得している。彼女たちにとって、書くことは自らのためでもあり、他のサバイバーのためでもあった。裁判を終結させるために手記を執筆したスマートは、エピローグで未だ続くトラウマとの闘いについて触れながらも、性犯罪サバイバーとしての使命を執筆理由に挙げている。ナラティブの最後で、同じ性犯罪サバイバーに「あなたたちは一人ではない、一人で重荷を背負う必要はないと知ってほしい」と呼びかけている<sup>37)</sup>。事件から11年、25歳になり、過去と向き合えるようになったスマートの魂のメッセージである。カンブッシュは、「私はこれらのページとともに過去と決別できるし、真に私は自由だということができる」と自伝を終えている<sup>38)</sup>。カンブッシュをインタビューしたジャーナリストも、ナラティブを書く行為は彼女にとって、「治療効果のあるもの」だったと述

べている<sup>39)</sup>。デュガードは心理療法専門家のレベッカに会い、彼女を「話し相手」にしながら、自分がいかにガリドーの自分勝手な考え方に支配されていたかを理解した。その支配から解放された時、「自己主張」することや自分のために人生を楽しむことが大事であることに気づき、「回復の過程にある」と実感したデュガードは、2011年に手記を執筆し、出版することになる<sup>40)</sup>。彼女は、ガリドーについて正確に伝えるため、ガリドーに自身の身勝手さをわかってもらうため、そして同じ苦しみを抱える人を助けるためにナラティブを執筆したと述べている<sup>41)</sup>。

執筆は、恐怖に満ちた過去を直視する作業である。つらい記憶をたどる執筆は痛みを伴う行為だが、少女らは、執筆という行為によって過去の経験を見つめ直し、自分の存在意義を確認し、未来を生きるためのレジリエンスを獲得した。そして、ナラティブは、加害者への公的制裁、性犯罪防止の世論喚起につながった。

#### IV. 結論

公の場でのナラティブは、個人の物語を集団の物語にする行為である。3人は自分しか知りえない「真実」の暴露により、過去の自分と距離を置いて見つめることでトラウマを昇華しようとしている<sup>42)</sup>。もちろん、これらはサバイバーが経験し、サバイバーが語る「真実」であり、犯人側の「真実」や報道された「事実」とは異なるかもしれない。しかし、レジリエンス獲得の一環として書かれたナラティブで重要なのは「真実かどうか」ではなく、彼女らが出来事を「どのように解釈・定義したか」である。3人は手記執筆をきっかけに新しい生活に踏み出した。書くことで過去は「解釈」され、「定義」され、レジリエンスの礎となった。レジリエンスは書く過程で醸成され、ナラティブが公にされることによって達成された。

アメリカでは、性犯罪防止・サバイバー救済に向けての対策が進んでいる。1970年代後半、CAP (Child Abuse Protection) というプログラムが開発され、子どもへの性暴力防止対策が講じられるようになった<sup>43)</sup>。さらに、エバリユエーション・カウンセリング運動 (reevaluation counselling movement) によって、サバイバーが子ども時代に受けた性暴力体験を聴衆の前で語るという催しが治療の一環として行われるようになっていく<sup>44)</sup>。リエバリユエーション・カウンセリングとは、「背景を異にする老若男女が過去の苦痛体験から解放されるために互いに効果的な援助を与えら

れる方法を学ぶ過程」であるという<sup>44)</sup>。子ども時代の性暴力被害について語ったサバイバーは、「語ることで自由になれる」「黙殺（拒絶）してきた事実を受け入れることで自分という存在がもっと全体性を持つ」と述べ、「秘密」を開示する行為がレジリエンスにつながったことを示唆する<sup>44)</sup>。

カンプレッシュやデュガードも認めているように、個人主義を基盤とする欧米社会においても実名で出版することにリスクはある。カンプレッシュは実名でメディアに出る前に、多くの人に偽名を使って潜伏するようアドバイスを受けたという<sup>45)</sup>。カンプレッシュは、2013年、自筆ナラティブをもとにした映画（*3096 Tage*, 2013, Germany）製作に同意し、自身のホームページで情報を公開する一方で、その後のメディアへの露出を控えている。デュガードも、「メディアはつねに脅威だった」と述べている<sup>46)</sup>。「ムラ社会」日本では、実名での手記公表は想像以上の困難とリスクを伴う。日本でも心的外傷を抱えるサバイバーが公の場で体験を語るというナラティブ・セラピーを実践している団体もあるが<sup>47)</sup>、サバイバーの多くは公の場における非難や制裁、偏見を恐れて沈黙している。3人の女性が行ったように、実名で証言することはリスクと痛みを伴うが、その証言によって救われた多くの「沈黙する」サバイバーがいることも事実だろう。

ナラティブ（語り、執筆）は、サバイバーに過去の再定義を促し、彼らの「止まった時間」<sup>48)</sup>を再び動かす契機となる。確かに、「沈黙の共謀」を破ることは容易ではない。しかし、サバイバーの沈黙によって守られるのは加害者であり、その一方で性犯罪は隠蔽され続け、被害は増え続ける。アメリカでは性暴力加害者の98%が一日も収監されずにレイプ後も日常生活を送っているというデータもある<sup>49)</sup>。「書く」「語る」行為は、性犯罪に遭った人々が、恐怖、解離、怒り、不安、悲しみ、痛みはすべて過去のものであり、自分たちはそれらを乗り越えて現在を生きるサバイバーであるという認識をもつきっかけとなる。ある性犯罪サバイバーは、犯人に手紙を書いた後、「それまで毎晩のように襲われていた悪夢やフラッシュバック」がなくなり、「泣きたい時に泣き、笑いたい時に笑うことができるようになった」と語る<sup>50)</sup>。彼女は、「書く」行為は「自分を解放してあげるプロセス」だったと振り返る<sup>50)</sup>。もしサバイバーが執筆や語りによってレジリエンスを獲得できるなら、我々はこれらのナラティブを受容・包摂し、罪を糾弾し、サバイバーの人権や尊厳を二重

三重に守る社会を作っていく必要がある。

## 文献

- 1) Finkelhor D : The National Center for Victims of Crime, (<http://www.victimsofcrime.org/>)
- 2) デイヴィッド・フィンケルホー：加害者：児童性虐待－新たな理論と研究 第4章(全訳), アディクションと家族, 25(2), 128-152, 2008.
- 3) 警視庁：平成25年版警察白書(The White Paper on Police), 2013.
- 4) こどもの虐待・性犯罪をなくす会 Think Kids : (<http://www.thinkkids.jp/think-kids/work>)
- 5) Summit RC : The child sexual abuse accommodation syndrome, Child Abuse and Neglect, 7, 177-193, 1983.
- 6) 森田ゆり：子どもへの性的虐待, 岩波書店, 東京, 2015.
- 7) Butler, Sandra : Conspiracy of Silence, New Glide Publications, San Francisco, CA, 1978.
- 8) Kuleshnyk, Irka : The Stockholm syndrome : Toward an understanding. Social Action & the Law, Vol 10(2), 37-42, 1984.
- 9) 武田雅俊：精神疾患のレジリエンス, 臨床精神医学 41(2), 121-125, 2012.
- 10) Bruner J : Acts of Meaning, Harvard University Press, Cambridge, 1991.
- 11) Freedman J, Combs G : Narrative therapy : The social construction of preferred realities (New York : Norton, 1996.
- 12) Polkinghorne DE : Narrative Knowing and the Human Sciences, Albany, NY, State University of New York Press, 1988.
- 13) Abels P, Abels SL : Understanding Narrative Therapy : A Guidebook for the Social Worker, New York : Springer, 2001.
- 14) 大滝涼子, 大沼麻実, 河瀬さやか, 金吉晴：幼少期のトラウマによる複雑性PTSDのための認知行動療法：STAIR(感情調整と対人関係調整スキルトレーニング)とNST(ナラティブ・ストーリー・テリング), トラウマティック・ストレス12(1), 71-77, 2014.
- 15) Smart E : My Story, St. New York : Martin's, 2013. p.243.
- 16) Tolman BL : The Forensic Panel, U.S. vs. Brian

- David Mitchell, June 16, 2009. <[http://www.forensicpanel.com/data/Unsorted/BDM\\_CST\\_Report-90528-1.pdf](http://www.forensicpanel.com/data/Unsorted/BDM_CST_Report-90528-1.pdf)>
- 17) Kampusch N : 3,096 Days, Trans. Jill Kreuer, London, Penguin, 2010. p.17.
- 18) de Souza-Campbell YCR : Pygmalion Effect, Encyclopedia of the Social and Cultural Foundations of Education, Ed. Eugene F. Provenzo Jr. & Asterie Baker Provenzo DOI : <http://dx.doi.org/10.4135/9781412963992.n300>
- 19) 前掲書 17), 156-157.
- 20) 前掲書 17), 117, 152, 137, 156.
- 21) 前掲書 17), 172.
- 22) 前掲書 17), 189.
- 23) 前掲書 17), 156.
- 24) 前掲書 17), 103.
- 25) Pierson V (District Attorney, County of El Dorado, California) : The Abduction of Jaycee Lee Dugard; Part 2 - Phillip Garrido : Sexual Predator, July 15, 2016. <[http://www.edcgov.us/Government/ELDODA/Press\\_Release/2016/The\\_Abduction\\_of\\_Jaycee\\_Lee\\_Dugard;\\_Part\\_2\\_-\\_Phillip\\_Garrido\\_\\_Sexual\\_Predator.aspx](http://www.edcgov.us/Government/ELDODA/Press_Release/2016/The_Abduction_of_Jaycee_Lee_Dugard;_Part_2_-_Phillip_Garrido__Sexual_Predator.aspx)>
- 26) Dugard JL : A Stolen Life : A Memoir, London, CBS, 2011. (デュガード, ジェイシー : 奪われた人生 18年間の記憶, 講談社, 2012)
- 27) Davis AY : Women, Race, and Class, New York, Vintage, 1983.
- 28) 前掲書 26), 51.
- 29) 前掲書 26), 154.
- 30) 前掲書 26).
- 31) 前掲書 15), 56.
- 32) 前掲書 15), 48.
- 33) 前掲書 26), 145.
- 34) 前掲書 26), 137.
- 35) 前掲書 26), 79.
- 36) 前掲書 26), 165.
- 37) 前掲書 15), 316.
- 38) 前掲書 17), 340.
- 39) CNN : CNN's Matthew Chance's exclusive interview with Natascha Kampusch, May 15, 2013. <<http://edition.cnn.com/videos/bestoftv/2013/05/15/ctw-chance-kampusch.cnn.2015>>
- 40) 前掲書 26), 253, 263.
- 41) 前掲書 26), ix
- 42) Burgess AW, Hartman C, Baker T : Memory presentations of childhood sexual abuse, Journal of Psychosocial Nursing & Mental Health Services, 33 (9), 9-16, 1995.
- 43) 吉田タカコ : 子どもと性被害, 集英社, 2010.
- 44) Re-evaluation Counseling : The Re-evaluation Counseling Communities, Seattle, USA. <<https://www.rc.org/tile/introductions>>
- 45) 前掲書 17), 233-234.
- 46) 前掲書 26), 251.
- 47) 家族機能研究所 : <<http://www.iff-saitoclinic.jp/goaisatu.html>>
- 48) 前掲書 15), 302.
- 49) RAINN (Rape, Abuse & Incest National Network) : <https://www.rainn.org/about-rainn>
- 50) 大藪順子 : この人とネットワーク : 被害者一人ひとりに名前があり, さまざまな感情がある, アクションと家族, 25(2), 97-103, 2008.

---

*Original Article*

---

## Abstract

### Resilience of Girls Who Survived Kidnapping, Long-term Captivity, and Sexual Abuse in America and Europe : A Qualitative Descriptive Study of the Narratives of Three Sex Crime Survivors

Sexual violence against minors, especially young children is an abominable crime. Although most sexual abuse survivors tend to remain silent to protect their privacy, at the turn of the twenty-first century, some sex crime survivors in America and Europe who were kidnapped, confined for a long period of time (more than six months), and sexually abused have published narratives under their real names. In their self-written narratives, Elizabeth Smart and Jaycee Lee Dugard in the United States and Natascha Kampusch in Austria clearly described the process of trauma and recovery from physical, mental, and sexual abuse. Focusing on resilience, which is defined in psychology as "the ability to respond to adversity and adapt to difficulty and unexpected changes," we utilized qualitative descriptive methods to analyze survivors' written testimonies of trauma and recovery from their experiences. We found three important factors in the development of resilience: autonomous resistance to "pseudo-family," biological family ties, and redefinition through writing. Appreciation of sex crime survivors' narratives will strengthen prevention and social sanctions against sex crimes. Based on the results in this study, we conclude that society should address people's ignorance of and prejudice toward sex crimes; protect survivors' dignity and human rights; and develop systematic treatment procedures in clinical situations, using both oral and written narratives as a means of helping survivors deal with and recover from their traumatic experiences.

Key words : sexual violence, survivors, trauma, resilience, narrative therapy

MIYATSU Tamiko , KOYANO Yasuko , ISHIBASHI Kazuyo